

調査結果からみえてきたこと

無藤隆 白梅学園大学名誉教授

本調査の前回は2018年であり、今回は2023年秋に実施しています。それは「コロナ前」とそれがほぼ収まってきた時期であり、また幼稚園、保育所、認定こども園にとっては2017年の三要領・指針の改訂の直後に対しておそらく理解が増してきている時期のはずであります。

同時に、少子化がさらに進行していき、共働きが拡大していつている時期でもあります。それを受けて、特に3歳未満での定員充足率が減ってきており、幼稚園の数が減るとともにその開所時間が拡大しています。ICTの保育者による利用が大きく増えています。保護者の園への要望として家庭ではできない体験等の希望が大きくなり、園の目標として遊び・興味が特に増えてきています(これは三つまでの選択なので特に重視していることが分かります)。

その一方で、通常の保育以外の活動としての体操・英語・音楽・ひらがなの書きなども増えてきています。

以上を見ると、園として保育が長時間化する中で、集団での体験を広げ、子どもの興味を伸ばし、遊びを重視する保育への転換が顕著になってきていますが、同時に、早期の知的・芸術的活動を特別に指導することも増えてきていて、保護者の多様なニーズに応えようとしていることがみえてきています。

汐見稔幸 東京大学名誉教授

待機児問題の解消は一般にいわれているのですが、今回の調査では各園の定員充足率の低下、特別な支援が必要な子どもの増加、保護者との関係づくりの間接化等がデータとして出てきて、保育・幼児教育をめぐる状況は新たな段階を迎えていることがよく分かる結果になっています。それは単にアフターコロナということだけではありません。

それぞれの結果に興味はありますが、私は、保育者の資質の向上のために必要なことの調査で、給与面での処遇改善、職員配置基準の改善、学び合う園の風土づくりが上位にきていることが実態を反映していると同時に、園内研修の充実、研修機会の保障ということもかなりの数を占めたことがもう一つの現実をよく反映していると思いました。

現場では、特別支援が必要と思われる子、対応に困難を感じる子などが増えているという報告があちこちで聞かれ、また保護者の要望が多様化していて対応に苦慮しているという声も多く聞かれています。不適切保育を気にしている現場も多くあります。こうした状況は、何よりも保育の現場にいて仕事をしている人が、新たな知識やスキルを必要としていることの反映だと考えられます。保育という仕事の専門性をもう一步高めて、養成の過程でも、就職後の研修においても、より専門的な知識・スキルを学びとる機会を増やすことが歴史的な課題となってきていることを示しているのです。キーワードは専門性の向上ということではないでしょうか。

荒牧美佐子 目白大学准教授

今回、新たに加わった保育者調査のうち、ここでは、「園での対話の機会」に関する結果を中心に考察したいと思います。

まず、「保育者が子どもの姿の記録をとる」について「よくする」と回答した保育者の割合は概ね6割程度、そして、「保育者同士で振り返りを行い、保育の見直しをする」については、4~5割程度といった結果となっています。おそらく「ときどきする」までの回答を含めると、もっと高い割合となるでしょう。子どもを中心とした視点に立ち、保育を振り返ったり、捉え直したりすることを通じて、各園での現状や課題を把握し、保育実践の改善・充実につなげていくことが、保育の質の確保・向上を支えますので、こうした一連の取組はとても重要です。

その一方で、「子どもが自身の活動を振り返る」ことを「よくする」割合は決して高いとは言えないようです。園における活動を計画し、振り返る際には、あくまで「子どもにとってはどうなのか」という視点を持つことが必要です。「子どもが自身の活動を振り返る」ことは、子どもが自発的・意欲的に活動に参加できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めるということでもあります。また、「保育者と保護者が子どもの姿や育ちを話し合う」ことは、保護者の子ども理解を深め、保護者と共に子どもの育ちを支えていく関係性を築く上で大切です。日常的に、かつ気軽に保護者とやりとりする機会を設ける工夫をし、信頼関係を築くことは、保護者とのトラブル回避にもつながります。

今後は、ICTの活用や園内での連携体制等との関連から、組織として保育の質向上のための取組を効率よく進めている園の特徴を明らかにすることが期待されます。

小山朝子 和洋女子大学准教授

今回の調査では、多くの保育者が働いている園の環境を肯定的に受け止めている中で、子どもを中心にしながら子どもの姿や保育のことを保育者同士で語り合ったり記録をして子どもの育ちや日々の園生活の姿を保育者同士で共有することを日頃から大切にしているとともに、保育者という仕事に対して満足感や充実感を感じていることも見えてきました。つまり、保育者は、保育者という仕事に魅力ややりがいを感じているのだと思います。

一方で、保育者の事務作業や給与と仕事量のアンバランスなどからの負担感を感じていることや、「保育者の資質向上のために必要なこと」において、園長は研修など長期的な視点での取り組みに意識が向いていますが、保育者は現在感じている負担感に直接的・短期的なアウトリーチの取り組みを求めており、保育者の資質向上のために必要なことへのズレが生じているように思います。それだけ、保育者は飽和状態になっている仕事量を抱えている状況であるといえます。

このようにみると、多くの保育者が、保育者という仕事のやりがいを感じてはいるものの、飽和状態となっている仕事量により目の前の仕事をこなすことに精一杯で、継続して保育者として働くことへの難しさにもつながっているといえます。長い間、なかなか解決できていない保育者の処遇改善や人手不足などの課題というのは、単純に給料をみあった金額にする、人手を増やすということではありません。保育者という仕事にやりがいを感じている保育者が働き続けたいと思える環境を整備するという視点での国の取り組みが必要です。さらに、保育者自身も保育の専門家として、保育者の資質向上に対する取り組みを継続することにも期待いたします。